松永延造全集

第一卷

国書刊行会版

松永延造全集第一卷奥付　昭和五拾九年七月
廿日印刷　昭和五拾九年七月卅日初版發行
監修者草野心平　編者伊藤信吉／辻淳／吉村
りゑ　發行者佐藤今朝夫　發行所国書刊行会
東京都豐島區巣鴨三丁目五番地拾七號／電話
東京九一七の八二八七／振替東京五の六五二
〇九　組版明和印刷株式會社　印刷セイユウ
寫眞印刷株式會社　製本河上製本株式會社
定價六千八百圓　落丁亂丁はお取替致します

目次

松永延造全集　第一巻／小説Ⅰ

夢を喰ふ人　5
目を求める人――夢を喰ふ人續篇　212
職工と微笑――詳くは微笑を恐怖するセルロイド職工　297
解説／辻　淳　397
解題・校異

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

松永延造全集　第一卷

小説 I

夢を喰ふ人

紹介者の序言

一時、横濱大施療院の精神病科に、下條と云ふ姓を持つた、從順な助手が働いてゐた。

彼は何一つ天分とか、自分で築き上げた技能とか云ふものを持ち合せなかつたが、多くの哀れな患者を快活に又親切に取り扱ふ事をせめてもの取り柄として、餘り立派でない生活を續けて行く青年であつた。

下條は、糞より他には食べようとしない一人の患者へ、色々と工夫して、白い米飯を食べさせてやつた時や、或ひは、苦しみは八角で、微笑は三角のものだと主張する、昔家相見を渡世にしてゐた一患者へ向つて、「いや微笑は決して三角ではない。斯う云ふものだ。斯う云ふものだ。」と説明しながら、自ら、餘り美しくもない顏で、一生懸命に、微笑の實例を示してゐる時なぞに、最も大きな幸福を感じてゐるらしかつた。

狂へる人々は、下條の環境に重大なる要素をなすものであつた。そして、下條は狂へる人々に取つて、結局は、何でもなかつたやうである。然し一つ附言したい點がある。下條の環境の大部分として、半圓を描く

所の、狂者の群團は、いくらか非生理的、非正規的な方法に於てではあるが、此の正直で哀れな助手へ多くの教訓を、いや或る場合には人生そのものを示して呉れたのである。

洋行中の夫が重病と聞いて、一人の娘を殘して、船中の人となつた一人の夫人が、海の眞中で、殘して來た娘の急死の音信に接し、又目的の港について見ると、夫も死んで居たと云ふやうな災厄の重複から、到々發狂して了つたと云ふ哀れな話を、他の狂人の口を通して聞く時なぞ、下條は健康者を相手にしてゐる場合と變りのない悲愁や同情を惜しむ筈がなかつた。

ある女患者は下條に全く戀して了つて、彼の女が發狂した原因やら、今は少しも氣がちがつてはゐないと云ふ事やらを打ち明けて、彼に結婚を迫りさへした。そんな時にも、彼が如何にして謝絶す可きかを考案する眞面目さは實人生に於ける全く同じであつた。

大勢の中に稀有なる人が存する如く、狂人の中にも亦稀有なる其れがあるのは不思議でない。或る美しい顏の狂青年は、下條へ「泣き悲しまぬ方法」と云ふ覺え書きを示して、彼を感心させた事がある。その方法の中、

一、泣き相になつた時は、顏の筋肉をいきみて張り、眼に力を入れて大きく見張り、表情を强くする、然し、顏が恐くなり過ぎると悲しみが怒氣に變態する危險がある。

二、業と微笑む。之は筋肉から心へと、習慣的に氣がるさを移す仕方である。

なぞと云ふのは彼のいまだに記憶する所であつた。

氣の狂つた弟を持て餘して、遂に之を毒殺したが、良心の苛責のために到々發狂して了つたと云ふ人が、嫉妬のために夫の兩眼をゑぐつた他の女氣違ひと、しんみり話しをしてゐる情景は又下條の眼に此の上もなく愍傷されねばならなかつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「何うして、貴方はゐぐる氣になつたの？」と男は聞き、
「別りませんわ。私、裏の森から馬鹿鳥の子をつらまへて來た事があるの。巣を見つけて、梯子を持つてつて取つたんですがね。その子が私の眼をねらつて、長い嘴を突いて來るんですよ。」と女は答へた。
然し斯う書き續けては盡きることがないであらう。
改めて語るが、下條はそのやうな環境の中に、可成り長い間を過したのであつた。そして、その先は何うなつたかを語るために、之から出て來る彼の自傳風な小說を書いたのである。
勿論この小說は諷刺を重んじた爲めに、事實をまげて了つた點もあり、且つ全然小說的虛構にとゞまる所も見えるやうである。例へば下條氏は施療院を辭職した原因が儘しき舌の過ちにあると語つてゐるけれど、實は、院長から盜賊の疑ひをかけられたからの事なので、もう少し細かく云ふならば、彼が所持して居た或る書物に院長の印形が押してあつたのである。勿論、彼はその書物を夜店から買つたので、恐らく院長の家にゐる書生が盜むで賣り飛ばしたものらしいのであつたが、院長はそんなに深い所迄は探求せず、直接に下條へ無氣味な視線を向けたのである。そして云ふ迄もなく視線と云ふものは、睨む眼と睨まれる者との間で、渦を卷いたり、迂回したりはせず、實に短い時間で、月へでも、太陽へでも直線的に走行する性質を持つてゐる。
下條氏は唯一本の視線に崇られて、病氣のやうに沈むで了つたのである。
此の時からか、それとも、もつと前からかは、明瞭に判らないが、彼は自分が大變な粗忽者であると云ふ觀念に强迫され初めて居た。彼の自傳小說中に、彼自身が何れ程粗忽者として表現されてゐるかは讀者の見る通りであるが、然も斯かる虛構は結局如上の强迫觀念に起因する點が多いのである。
次に、もう一つ丈、附言したい。それは彼の快活さが、生來的のものか、それとも、人生の悲愁を人工的

に慰問するためのものか？　と云ふ點であるが、紹介者はその兩方であると答へたい氣がする。それ故、彼がユーモアに似たものを以つて語る時にも、彼の心の奥に、何か他の悲しみが祕んで居はせぬかと覗いてやる事は我々に取っての樂しみである。

何れにもせよ、人は未知なるものから、既知なるものを得、その既知なるものゝ中に、更に新らしい未知なるものを見出す。下條が如何に自身の眼を疑ひ且つ信じたか、如何に諸藷の形象を捕へ、且つ失ったかを、之から少しづゝ見て行くのは、無駄にもなるが、又德にもなる事であらう。何となれば、人は自分より小さい者からも教訓を得られないとは限らぬからである。

紹介者識

一　儘しい舌

立派に醫師の免狀を持ってゐた譯でない私は、横濱大施療院に勤務してゐた頃も、唯ほんの助手の又助手として氣兼つぽく働いてゐるに過ぎなかった。そしてアナムネーゼを書けば、字を間違へたり拔かしたりし、大火傷をした機關師なぞが擔架で入院して來たりすれば、誰よりも一番先へ面喰って、一番餘計に粗忽を働く始末であった。尤も私の粗忽は私の學力の不足や、經驗の稀薄なぞから根本的な起因を見出し得ない類のもので、其れならば全體何者が私の腹中に粗忽の本體として隱存するかと問はれるかも知れないが、と云って、此の問ひに明瞭な答へをする事は現在の私には不可能と云ふより外なく、又若し强ひて私の粗忽の原因に就て卽席の詭辯を弄するならば、私は私本來の粗忽の爲に、矢張り粗忽な言葉を不用意に不整合に排

列するに過ぎないであらう。然し私は自分自身を深く愍傷し乍ら次の辯明丈を附加するのを許して貰はう。其れは他でもない。私は之でも、割合に頭の明晰な男であり、外部から見ると、支那の軍艦の樣に魯鈍な形の頭蓋ではあるが、その內部には案外にも、色々と所謂「思想の爆彈」なぞも積み込んであるので、唯、考へれば考へる程口惜しいのは、それを口に出さうとすると、直ぐ吃つて了つて、時とすると思想が言葉を支配する替りに、舌が思想を變形して了ふ惡癖である。先づ、極く、通俗的で然も代表的な實例を一つ丈擧げるのを惜むまい。其れは斯うである。或る眞夜中に、體中大火傷をした機關師が擔架で病院へ運び込まれて來た。折惡く宿直の醫師達の中に外科擔任の人が一人も居なかつた。そして泌尿科の若い醫師と、精神病科の私と、他の二三人が怪我人の周りを圍むで、狼狽し乍ら、其れでも、何うにか、何かする爲に、手の先を働かしたり、足を藻掻いたり、齒ぎしりをしたり患者が痛がつて顫へると、自分も何かしら、偉い醫者、卽ち醫者の醫者に縋りたい樣な氣持になつたり、全體的に云へば、個々の感情が相殺し合つて、斯んな緊急な場合だのに、皆の頭は空虛になつて了つてゐる樣だつた。其の時、率先して、兎も角も一定の意見を抱いてゐたのは泌尿科の若い先生だつた。彼は此の怪我人の足へ繃帶をせねばならぬと思つたのである。彼は助けにならない私を、助けにしようとするらしく、哀訴する樣な眼を私に向けた。「君、繃帶をした方が好いだらうか、其れとも何うだらうか。」と云ふ意味が今にも涙の沁み出し相な其の眼に、明白な度合で讀まれた。「さあ、何うだらう。」と私も眼で答へた。尤も其れは惡魔的な口で答へるよりも、私としては安全な方法であつた。何故と云つて、私の舌や喉の筋肉は私に取つて、屢ば不隨意となり、その上に主人へ反抗して、勝手な意見を陳述する事さへ躊躇しない狼藉者だからである。一層激甚になつた患者の唸り聲に威嚇されて、我々は夢遊し乍ら繃帶を卷いた。一番怜悧な婦人科の助手丈が之には手を出さないで、用もないのに、急がし相に上を見たり、下を見たり手を洗つたりしてゐた。彼はある行爲に對する責任を逃れる爲にはその行爲

をしないに限ると考へたのかも知れない。

所が大變な事になつた。患者の筋肉は脹れ出して來た。卷き締められた繃帶にくびられながら、下から、せり上げて來る肉の勢ひは實に實に凄じい有樣だつた。患者は繃帶の呪縛の爲に餘計苦痛を增して泣き叫むだ。「おゝ、之はいけない。見なさい。繃帶されない部分の方が二寸も高く膨れ上つたぢやないか。おゝ、繃帶であんなに、くびれて、之はいけない。其處から肉が皆裂けて了ふぢやないか。解いて、解いて、繃帶を解いてやらねばならない。」と皆が一時に考へた。泌尿科の若い醫師は顫へ乍ら、賴りにならない私を賴りにし乍ら、哀訴する樣な眼で私を見上げた。一寸云つて置くが、私はきまりの惡い程丈の高い男で、時々膝關節から下は自分のものでない樣な氣がする位だつたのである。私も其處で哀訴する樣に若い醫者を見下した。見下し乍ら哀訴すると云ふのは、少くとも、奇妙な、間の拔けた感じを伴はずには居ない仕方であるが、身體の不自由には慣れた私であつたから、何うやら其の場は奇妙な儘に片附けて、膝關節以下の私の身體の剩餘に就て、神を恨むと云ふ樣な無暴はしなかつたのである。其れは別として、我々はもつと緊急な焦點內に立つてゐた事を喚起せねばならない。「解かう。」と一同は私かに考へた。誰も無口であつたが、誰かの手が繃帶を解き初めた。患者は尙の事痛々しく、顫へ乍ら泣き立つた。見れば肉の塊りが繃帶の方へ粘り附いて、ボロ〳〵と取れて來るのである。「之はいけない。」と一同は考へたらしかつた。「何うしよう。」と泌尿科君が眼で私に訴へた。「さあ、何うしよう。」と私も鼻を顫はせた。喉で聲帶が蠕動したが、幸ひな事に、舌は閉された門の中に固く抑へ附けられてゐた。皆は同時に何うしようと考へた。個々の「何うしよう」が蝟集し重複して、今にも聲になり相であつた。「あゝ、繃帶をその儘で置く方が好いのかしら。それとも取り去つた方が好いのかしら。その儘で置けば肉がくびれて千切れるし、と云つて、取れば肉が粘り附いて來るし。」と私は悲みの中を泳ぎ廻りつゝ、依り所もなく獨りで考へた。火傷をした場合の人間の肉の

弱さ。それを大急ぎで手當てする場合の人間の智慧の粗忽さ。私は此の二つを頭の中に描いて、悲しい悲しい角力を取らせてゐた。おゝ、實にその時である。私の眼から、熱した紐の樣に涙が引張り出されて來た。「可哀相に、この患者も、そして我々も。」と私の思想は云つた。私の心は火傷した樣に痛むだ。おゝ實に實にその時である。私の引き締つてゐた口は、ぶり返した古い傷の樣に、急に思ひ出してパクリと開いた。そして、蓄音機の樣に獨り手に喋つた。「之は、之は滑稽ですなあ！」その聲は又馬鹿に大きく室中に反響して、反響と反響とが再びぶつかり合つた。一同は普通の驚き以上の驚きを以つて直立不動の姿勢になつて私の大きな口を見た。然し誰よりも一層大きく驚愕したのは當人の私であつた。「しまつた。」と私は思つた。そして既に外へ飛び出て了つた自分の聲を、出來る事なら再び吸ひ取つて腹の中へ收めたかつた。全體私は何故あんな途方もない言葉を口走つたのか。私はその場に居たゝまらなくなつて、外へ飛び出してからずつと後に、斯う反省せずにはゐられなかつた。實際私は患者に對して恐らく誰よりも深厚な同情を抱いてゐた筈であるに、何故あんな無禮な嘲弄を吐き出さねばならなかつたのだらう。心理學的に云ふと、人間の心は或る程度迄物體と同じ樣な「反動」を起すものであらうか。强裂な悲痛は時とすると、踊り上り度い樣な、絶望的な狂喜を、反動的に呼び起す事がある。その爲に私はあんな失敗を演じたのかしらむと、自分の暗い心を覗き乍ら、吃つて云つた。けれど此の無責任な說明は極めて獨斷的で、自分をさへ首肯せしむるに足りなかつた。では、何が、何者が、私をあんなひどい目に合はしたのか。私は仕方なしに好く云ふ潛在意識なる怪物を持ち出して來て、何うやら此の疑念に說明を附け得た樣な氣持がした。其れは詰り斯うなのである。あの時私の意識は單純な悲愁の感情で一杯になつて居て、最早物を深い所迄考へ詰める力を失つてゐたのだが、潛在意識の方は、顯在意識の悲愁に刺戟され、私を措いて獨り思想的に働き初めたらしいのである。其れは頻りに人間生活の苦惱多き事を痛嘆し、次に人間が災厄を豫防し、防禦する事に就て何れ程無力

無知であるかを想到した。然も人間は一人で偉いものゝ樣な氣がしてゐる。之は滑稽な事であると、斯う考へたらしい。恰度折も折私の悲苦はその途端頂點迄高まつた。そして何うしても唸らずには居られなかつた。その唸り聲は不意に潜在意識の考へを言葉にして外へ押し出して了つたのである。さうとは氣附かない私は、私自身の言葉に顫へ上つた。何故この悲慘な情景が滑稽なのだ、と、私は私の我儘な舌を問ひ詰めずには居られなかつた。私は業と舌を嚙むで血を出してやつた。舌は蠕蟲の樣に顫へて脹れ上つた。「馬鹿！そんな小さい痛みで脹れ上つて何うなるのだ。」然し、舌の痛苦は結局私自身の痛苦なので、舌と自分とを切り離して、別々に見做してゐる私は、少しも復讐心を滿足させたと信ずる事が出來ず、唯何となく不條理な氣分で苛ら立つ丈であつた。偖て其の翌日、悲しい事の中で殊に際立つて悲しかつたのは、火傷患者が死に際迄私の嘲弄を記憶してゐた事實である。「もつと好い病院へ遣つて呉れ。金はあり丈出すから。此のお情け病院から出して呉れ。金は之から東に當る山の樹の根元に埋めてある。金の延べ棒も崖の崩れた所からズラツと二列に竝むで首丈出してゐる。早く、早く、おゝ、何故俺の苦しみが滑稽に見えるのだ。」と患者は最後の囈語を口走つて、軈て岩より靜かになつて了つた。私は申し譯がなくて、唯慌て乍ら長い廊下を驅けて、何處かへ行かうとした。けれども私は思ひ直して院長室へ自分自身を運むで行つた。私は辭職を申し出た。院長は其れを喜むでゐる樣に、出來る丈手つ取り早く片を附けて呉れた。

「私の舌はパンを求むるに拘らず、尙パンを失はしむる動因を造る。」と私は愚癡に似た樣な美辭で私自らを慰問した。

然し其の先何れ程恐怖す可き饑饉の日が繼いで來たか。石さへも尙叫び出さずにはゐない樣な苦しみを、人間の私が默つて切り拔けられる筈もなかつたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com